ロバト・ブラウニングの悲劇
「ヴィクター王とチャールズ王」

三谷　正

(B) 後篇「チャールズ王」(A)前篇「ヴィクター王」は前号に掲載済み

(一) チャールズ王の留守に乗じての老伯ヴィクターの王座奪還策の失敗

(二) 再度の王位奪還謀略の破綻とチャールズ王の英断

(三) 王位を放棄しようとするチャールズ王と断固それを保持させる后ポリゼナ

(四) 捕縛した父へのチャールズ王の譲位と喜びのあまり急死する老伯ヴクター

(五) 結　び

(一) チャールズ王の留守に乗じての老伯ヴィクターの王座奪還策の失敗

チャールズ王はエヴィアン〈Evian〉温泉場に滞在しタリン城を留守にしている。老伯はこれに乗じ王位の回復のため急遽タリン城に帰る。しかしチャールズに譲位の際、既にこの事を意図し、ドルミアを新王の傍に置き画策を巡らしていたので人目を避けるため、ドルミアに直接会わず、かれにはただ宮廷の様子を密告させるだけにしていた。従ってドルミアは宮廷にあってすべてを承知しながらこれを隠していたのである。そこでドルミアは、老伯がタリン城に入るや、后ポリゼナの部屋に入り、しらばくれて忠誠ぶり后に言う「テンデ伯は王城不在の一年が過ぎ、今、情婦を連れ王城への帰還を画策されています。これをいかがお思いですか。何卒私の進言によって行動なさいませ。私が止めなければ

ロバト・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

二人は帰って参ります①」と。何も知らぬ后は大臣の意外の言葉に「それはいつのこと②」と問う。大臣は「国内問題が落ちつきましたので外交問題の解決次第帰って来ます。それでこんな風にしようと思うのです③」と書類を差し出す。后はその書類を読みながら「もしかしたら、これはあなたと老王の企(たくら)みではないの。あなたが心配しているとの言葉は表面(うわべ)の口実と思えてよ。何か苛苛(いらいら)しているではないか④」と図星をさす。しかし大臣はそれを打ち消し、その書類を新王に見せることを求め、更にかれが老王の案内役として帰る意図を付け加える。そこで后は疑を深め、老王の帰還という緊急時に老王の助けをする大臣がタリン城にいる理由を追求する。大臣は答える「その書類⑤を安全に保管して下さい。私のこの進言の証拠が残らぬようにして下さい。伯が帰還され、新王が退位される事態にでもなれば、私の進言が無駄になりますから⑥」と。后は「チャールズが退位とな⑦」と驚く。大臣は言う「新王は立派な方です。賢明な方であることは以前から存じています。新王がしっかり王座にお座り続けられる事を念願していました。でも新王と一緒に仕事をすることは終りました。万事休すですな⑧」と。后は「本当にチャールズが王でなくなると言うの。そんな悲しい事あるものですか⑨」と歎く。この時、エヴィアンから帰った新王が登場。大臣は后の傍から下(さ)がる。新王は后に言う「さあ、喜んでくれ。懐かしい接吻で喜んでくれ。このようにそなたが僕を抱擁してくれるには充分の理由がある。仕事から解放され暇を得てやっと自分に僕が戻れたんだから。タリンで何か変ったことなかったかい。心配事の重荷がそなたになければよいのだが、僕は今日は自由なんだ。何の仕事もなく、気楽なんだ。厄介な年も終るとそなたは言ったね。厄介な事も、厄介な事を背負った僕も終った。僕は気がすっとしている。有難いことだ⑩」と。后としては新王の退位の件を聞いた直後なので、新王のあまりに喜んでいるのを不思議に思い「あなたどうなさったの⑪」と問う。新王は内治、外交の成果⑫をあげ、父にも情報を送り、大変な安堵(あんど)のうちに后のもとに帰ったことを告げる。その時、大臣が新王の前に進み出て、外交問題よりも老王の王位回復のためのタリン城帰還阻止(そし)の用意の重要性を述べる。新王は驚いて后に大臣の言葉の真偽を尋ねる。大臣は傍から(后に渡した書類を指して)その書類に書いてあると言う。后は新王に大臣には何か企みがあることを告げる。そこで新王と大臣の間に次のやりとりがある⑬。「ドレミア(チャールズ)、いつからお前は父の動静を窃(ひそ)かに探っていたのか。その上手に書かれた書類が何を示しているかは僕には分かる。容易に分かるんだ。一体いつからだい」ⓐ(ドルミア)「あなたが屢々ご自身の事に熱心だった時も、私は此処であなたの仕事をしていましたが、私は何をしていても自分の利益になる事は私の仕事に利用します。その点では私はあなた程潔癖ではなく、老王がチェンバリーに行かれた最初から、七人の召使のうち五人を買収ⓑしておいたのです」ⓒ(チャールズ)「それじゃお前は父を嫌ってでもいるのか」ⓓ(ドルミア)「それは丁度あなたと同じです。以前は

老王が好きでした。今は老王を嫌っています。老王は既にチェンバリーを出発されました。此処にあなたの衛兵いますか」[ｃ]（チャールズ）「衛兵かい。衛兵は此処にいたんだよ。お前が迷当（めんどう）な事を持ち込んで来たからお前を捕えることを命じたのだ」[ｄ]（ドルミア）「私が来たとて衛兵はいりません。以前は私はあなたに必要な召使ではありません[ｅ]でしたが、今はあなたの選ばれた召使として生きている[ｆ]のです。でもあなたは私を必要とされず、私を捨てられますか。では私を捕えなさい。しかし今一度私の責任を差し上げます。その書類を無理にでも読んで戴くようにするのが私の義務[ｇ]なんです[ｈ]（ドルミアは大臣のしるしを差し出す。チャールズはそれを受けとる）」（チャールズ）「その書類を差し出すのか。僕がそれを敢えて読まないとでも思っているのか」[ｋ]（ポリゼナ「お読みなさい」と言う。）「王が厳粛に王冠を僕に引き渡してから二年目だ。しかもそれもまだ一ケ月も経たない。それなのに王冠を取戻す王の意図と、僕を土牢にぶちこむことがこの書類に書いてあると言うのか」[ｉ]（ドルミア）「私の推測[ｍ]にすぎませんが、チェンバリーには老王はおいでにならないことがこれによって言えると思います」[ｎ]（チャールズ）「お前はお前の言葉の真実を証明せよ。もし証明が出来なければ、お前を罰するぞ」[ｏ] ここで新王は后に言う「ポリゼナ、僕等二人の間に深まり、暗くなって行くヴェール[ｐ]を破る一つの機会だ。どうしても言え。あいつが証明の出来ると言っている父上への疑の虚偽[ｑ]であることが分からんのか。言え。少くともその疑は虚偽の疑であると望[ｒ]みたくはないのか。どうじゃ、言え。他の事なら僕の心の最も愛するそなた、言え[ｓ]」と。后は夫の激しい言葉を悲しむが、ドルミアの言葉を信じているが故に、極めて残念がる。しかしチャールズは妻の心情に構わず、老王が宮廷に既に来ていることを知っているので、ドルミアに老王のいる部屋へ案内することを命じる。二人は出て行く。その時、中央の戸口から老王が現われる（老王は新王が温泉場から帰っているのを知らない。）老王は独語する「確かに人の声が聞えたんだが。 いや、そうだ。すぐにもこの部屋のど真中へ進むことじゃ。懐しい部屋だ。何も変っていない。もっとわしの座に近づこう。ドルミアいるかい。ずっと前からあいつに会[ｔ]いたかったんだ。あいつドルミアの奴、わしの言っているのが聞えないのか。のろいぞ。融通のきく奴だったのに。わしは意地悪るをあまりに急に初めたもんだからあいつの緊張を緩（ゆる）めたかな。どっちみちあいつは密告に来るだろう。何だったかな。なぜわしは此処へ来たのかな。すべてが雑（ざつ）だわい。なあに、すべてを雑のままにして置こうか。いや、引返すに充分の時間はある。尤も引返す理由なんか何もない。……本当にこの歩み、こいつはわが身が哀れで帰ったので、チャールズに会うためじゃない。チャールズは今は都にいないのだから。ああ、哀れなるわれヴィクターよ。だがこうして帰って来た。悪賢い老いはいやなもんだ。若者なら感情を隠すことも工夫する。若者ならぬ大人でも、力強さ、熱烈、活力、機智を柔（やわ）らかに発散する。悪企みも自発的恩恵に変えることが出来る。然るに恩恵の心がなくなり、悪企みが生活の要素となる老いはいやなもの

だ。いやそうじゃない。なぜ此処で立ち止る必要があろうか。求めることを気にしなければ、タリンはわしの持つべきものだ。軍隊のすべてはわしのものだ。わしの部下の兵士共の戦い振りもこの目で見てきたのじゃ。また宮廷もわしのものだ。就中、大臣ドルミアもわしの大臣だ。皆に施(ほどこ)してやるべき恩恵はわしの手にあるのだ。このタリンへ帰る決心をしたからには真夜中になる前に王冠を取返してみせる。わしを立ち上がらせたタリン城への帰還のこの旅でわしは疲れた。でも到頭此処に来た。あとはわしの好きなようになるに違いない。わしがこの王座に坐れたらなあ。そして万事が自然と元に戻り、王冠のない仮面が剥(は)がれ、白髪と熱い血潮が現われたらなあ。新王は王冠を着けてはいるが、あいつの今の時代より前の時代の方が世の中はもっと平穏だったと人民は言ってくれてるんだ。わしの想い女も嘲笑されてはいるが、わしに熱い愛の想いを寄せている。あの女が悲しい顔をし、跪(ひざまず)いてタリンへ帰ることを嘆願したんだ。それでもまだチェンバリーでは初めのうちはタリンに帰ることは夢の中のものだった。しかしやがてその夢を振り落とした。そしてタリンに帰ろう、再びヴィクター王となろうと決心した。それでもそれが善いか悪いか迷っていた[19]」と、ここまで老王が独語した。その時、チャールズが書類を持って登場し、かれも独語する「金銭[20]目当ての奴の金銭欲しさの不満の文書だ。特権を望む憐むべき奴の虚偽の文書だ。考耄が生きる限り威張り続ける短気の文書だ[21]」と。そしてかれが振り返った途端父を発見する。父は驚いて立ち止り「エヴィアンに行ってたんじゃなかったのかい。どうして急いで扉を開けないのかい。お前は父を歓迎しないのか[22]」と怒声を発する。これを聞いて新王は心中で言う「人の父たる者の声ではない。これは昔ながらの傲慢な声だ。優しい父の情は永遠に失くなったのか[23]」と。しかし新王は腹立たしく思いながらも、子としては優しい態度で父に接せねばならぬと考え直(なお)す。そこで親子の間に次の対話[24]が行なわれる。「父上(チャールズ)お帰りのこと知っていました。健康がよくないためなのでしょう。実際チェンバリーは寒々とした不健康な土地です。晩年のお住居により相応しいヴェネリア〈Veneria〉かモンカグリエ〈Moncaglier〉をお選びなさりたいのでしょう。そこならお住居にぴったりです」ⓐヴィクター「エヴィアン温泉場から発信のスペイン問題解決のお前の文書受取ったぞ」ⓑチャールズ「知恵の足りない私が苦しみながらの仕事に満足して下さり、エヴィアンに私を訪ねることを差し控え下さったのに、此処に父上のお出ましは私の心を動揺させるだけです」ⓒヴィクター「お前の心を動揺させるってかい」ⓓチャールズ「そうです。私の心を動揺させます。永久に私を父上の策からは無関係にして下さい。こんな悪企みは馬鹿馬鹿しいです。私はこんなことは問題にしません。私の問題にしますのは誠実だけです。……父上は王冠を取り戻すおつもりですってとか。もっと違った言い方をすべきでしたかね。いや、冗談はやめましょう。父上、本当の話をしましょう。ご健康お悪いですか。父上の馬車に何か足りないも

のありませんか。生活の不満を口にすることを嘲笑する世間など気にせず、不満を私自身に言って下さることは賢明なことです。しかし今度のご訪問に就いて誰一人その理由を知らないことは私の気掛りなんです。おっしゃって下さい」㊀「チャールズ、もしわしがもう一度王冠を手に入れることを求め、わしが国政の煩わしさで悩みたいなんて望むなら、何がこの痛ましい心㋐の慰めの保証となるものか。わしは王冠をお前に与えたんだ。もしわしが王冠を回復しようとしたら、うーん、一体どうなるか」㊁「あっさり申します。父上は私に王冠を戴き続けることを誓わされました。それだのに父上は王冠の回復を意図されています。……父上は父上の分野を守って下さい。私は私の分野を守ります。でなくして私達が互に奪うことを続けると、それは神の領域を冒すことになります。……私は王国を保全することを誓いました。これは私の真実です。……この一年で時代は変りました。今の人民は父上が利益を与えられた時の人民ではありません㋑」ここで父は子の言葉に反対し、新王は民主主義を持ち込んで、寧ろ人民に災㋒をもたらしたと言う。それに対しチャールズは権力を乱㋓用せずに人民の幸福を計った、その方法に対する悪口は敢えて忍ぶと答える。父は今度は態度を一変して嘆願的な次の言葉を発する「もしわしが安物の装飾品まで奪われて死ぬとしたら、またお前の頭をしっかりと巻いて堂々たる王者の風格を創り出している王冠をいつまでも憧れているとしたら、またお前の一振りでその風が侵入者をすぐに退(しりぞ)ける王笏を憧れているとしたら、或はまた、すべての人民のときめく心臓を把握して創り上げたお前の王国のこと、すべての踊る人達の心臓の鼓動の感じられる豪華な舞踏会のことをいつも憧れているとしたら、またわしの父祖達が創り上げた街をわしがうろつき廻らねばならぬとしたら、お前はもう一度わしを元のわしの身分、ヴィクター王として都に住むようにと言ってくれるかい㋔」と。この図々(ずうずう)しい言葉が終った途端にポリゼナを案内してドルミアが登場し、ここで四人の間に次の会話㋕が交わされる。先づポリゼナが進み出て、涙で目を湿ませ唇を震わせて言う「これは憶測ですが、チャールズは父上が王位を憶れておいでである以上、それは仕方のないことと屹度言うでしょう。しかし私は偉大な男をかれ自身から救わねばなりません。チャールズがよく勤(つと)めて得た名声を投げ捨てるのを見たくはありません。チャールズの絶対的価値の壊滅崩壊など起してはなりません。こんなことを敵に知らせてたまるものですか。父上はご自身と危険の間に、その子を突き出されました。しかもその子が頑張り通して危険を脱出した途端に、父上は毒蛇のような悪企みを胸に抱いて、その子を没落させようとこっそり帰って来られました。……こんなことをして今、敵に文句を言わせてはなりません㋖」と。男勝りのポリゼナの言葉に、流石の老王も野望の挫(くじ)かれた顔をする。これを見て大臣は言う「後悔なさいましたか㋗」と。老王は悄気た様子をおくびにも出さず言う「ドルミア来たのかい。チャールズでかしたぞ。立派に

やったぞ、巧みにやったぞ。わしは何かと強引に身を乗り出し、口を挟む執念深い親父なのに、お前は些細な事にも思慮を深くし、早馬でよくも知らせてくれたなあ。人民は難かしい請願に答えるお前の親切に喜び、お前を見直すぞ。ドルミア有難いぞ。お前もお前の役目をよく果した。しかしお前に願いたいが、わし老伯にその収入を脹らませるためにもう少し多くの扶持が入るようにしてもよいではないか。あんたポリゼナ、わしの破滅に瀕する財産を補強する許可を出すべき時機を失してはいませんか。わしがそなた達に期待している成果を充分に得るためにはあの一覧表をよく覚えておくことですなあ。あれには、そっくりくれてやったものに就いての賢明な用い方の諸注意が書いてあります[c]」と。その時、チャールズが突然「有難く存じます。父上、私を王から降して下さい。父上ご自身が王になって下さい[d]」と言い出す。老王は驚き妙な顔付きをし、二言三言を口にして退場する。チャールズは、老王と大臣が妻ポリゼナをもかれらの悪企みの虜にしようとしたことを見抜き憤懣遣る方ないのである。しかしかれは内心の無念さを顔に出さず平然としてドルミアに言う「ドルミア、お前も聞いたようにお前は間違っている。父上の来られたのは別の目的で来られたのだ。父上はモンカグリエルを望んでいられる[e]」と。ドルミアは悪計の発かれたのに驚く。しかし、奸智に闌けるかれは図々しくも言う「老伯の目的を断言申し上げることが遅れ、私は信頼を失いました[f]」と。これに対しチャールズは言う「お前は尚も大臣にとどまれ。お前の僕を侮辱する喜びに浸れ。僕は物を言うのも息苦しくうんざりしている。お前の喜びに浸れ[g]」と。これに対しドルミア答える「浸るべき喜びなんて少しもありません。殉教者として死ぬことも出来ません[h]」その時、ポリゼナは夫を窘めて「チャールズ[i]」と声をかける。チャールズは言う「今は神への賛美の言葉も言えぬ[j]」と。

(二) 再度の王位奪還謀略の破綻とチャールズ王の英断

舞台が変り、大臣が書類を手に持ち坐りながちら独語する「これは効果が現われて来た。今はチャールズ王とヴィクター王の平均が保たれている。しかし主犯人のドルミアのわしはこの形勢をどっちかに決定せねばなるまい。機は熟している。……人は人生の短かさを歎く。しかし七十才の四分の一の二十年を率直に一生と呼んで執着することもない。言ってみれば、わしも二十年間悪いことばかりやって来た。平地の一本木(ドルミア自身のこと)は永い間には成長を妨げられる。後に成長を続け大きくなったとしても、それはしれたものだ。しかもいつまでも切株として生き恥を晒すだけだ。一方、将来に向って最初の芽の立派さのために最初に抑制された若木(チャールズ王のこと)は森の中の緑の瑞々しい兄弟関係の木の中

にその気品が保たれる。こんなわけでわしは芽を出し成長したところで、屹度切り落され束ねられ焚き付けにされるのが関の山だ。さあ焚き付けになろうか[26]」と。その時、チャールズとポリゼナが従者を従え登場。ドルミアはチャールズとポリゼナの各々に次の対話をする[27]。「あなた適当な時機に私の役目を解職して下さい。タリン城からあなたを無理にお呼び出しし、私は一切を今夜打ち明けねばなりません。あなたに心の痛手を負わすことが沢山あることと存じます。……今夜のことをあなたのために悲しみます」ⓐチャールズ「何だって。わが王国が切迫した危機にあるとでも言うのかⓑ」と。そして両者の間で外交上の問題が色々と話された後に、チャールズは書類を調べる。ドルミアはポゼリナに向って言う「ヴィクター王のような気性は国を治めるには役立ちます。人民を恐れさせ、離反させることはありません。ですから人民を締め付けるのもよろしい。王の傍の者全部が手を揃えて締め付けに掛かれば最上です。しかし王だけが締め付けるのみで、王の周囲の者共がそれに追随せず、黙りを決め込んでおれば結果はあんな政治に終ります。そこに新王の政治が始まったのです。民意を問い、機構を推進して政治を始めることは全く別の機能を発揮しますからⓒ」と。その時、チャールズは従者に向って王位の印を持って部屋を出るように命じ、ドルミアと再び次の会話[28]を交わす。「ドルミア、わしに答えよ。何故フランス王はわが領土に侵入するのか」ⓓドルミア「何故ですって。一時間前にお知らせしませんでしたか」ⓑチャールズ「その時、聞いた事をもう一度聞きたいのだ」ⓒドルミア「私が申しました通りに老伯が危険を冒して王位を回復する決心をされたからです。私の察するところでは、老伯はご自身を助けるために外国の軍隊を呼び入れられています」ⓓチャールズ「どんな根拠があってお前はそんなことを言うのか」ⓔドルミア「伯はあなたの軍の隊長レビンダー〈Rhebinder〉に手紙を出し援助を求められました」ⓕチャールズ「レビンダーを試すためか。かれには外国人の血が混じっている。その外何かないか」ⓖドルミア「レビンダーは拒絶しました。またその数時間後にデル・ボルゴ〈Del Borgo〉に、あなたに対し退位法令を出すように求められました。かれも拒みました」ⓗチャールズ「その次に何が起ったか」ⓘドルミア「真夜中、ほんの二時間前タリン城の城下を見下す砦へ、唯一人の従者を連れ単身乗馬でソコルソ〈Soccoro〉門に向われ、太守サン・レミ〈San Remi〉に開門して伯を入れることを命ぜられました」ⓙチャールズ「その意図は察知できる。では三人は僕に忠実であったのだな」ⓚドルミア「かれらは私にそれを告げました」ⓛチャールズ「それは極めて忠実だ」ⓜドルミア「私自身の報告と一緒にこのことをお知らせして置きます。もし一時間前にあなたが発令されていなかったなら、伯は救助を求めフランスへの道に出ておられたと思います」ⓝチャールズ「それは大変よかった。お前は帝王の僕に充分忠勤を励んだ。僕はそれを保証する。それは確かにわれわれ父子を不名誉から救うお前の策であった」ⓞドルミア「今また私の進言を申します。……しかし今度の進言はもっと辛いものかと存じます。それは緊急事態のため作っ

たこの書類にご署名戴くことです。これは怪しい行動に出た者達、目を離すことのできない者達の一覧表です。あなたがどんなに嫌であっても捕縛されねばならぬ伯一家の数名の名も入っています。しかしこれは事件が求めている伯自身を逮捕されること程お辛いことでないことを申し添えて置きます」ここでチャールドはドルミアの進言に対し、更にかれと次の問答をする。「その三つの書類を僕に渡せ」（書類に署名を終えて）「そら逮捕状を見ろ。僕は署名したぞ。どうしてお前は青い顔をするのか。お前の進言に従って大胆に行動し、僕の義務を果すのだ」（書類を別々に読みながら）「私がただ怪しいと思う人達を捕縛なさるのですか」「お前はかれらを怪んだのではなかったのか」「疑もなくそうです。しかしトルキエリ〈Torquieri〉はタリンの太守ですぞ。リヴァロル〈Rivarol〉も捕縛されますか。かれは首府の半分の人達に影響力を持っています。ラベラ〈Rabella〉も捕縛されますか」「恐れることはない。僕に任せておけ」（尚も書類を読みながら）「あなたはこの一覧表の人達を投獄することを命ぜられますか」「父上に極めて近しい者達は、些細な理由では捕縛さるべきないとでも言うのか」「それにつき申します。チェンバリーの元老院議長セント・ジョージ〈St. George〉は陰謀を企んでいます。これを捕縛せずに今捕縛されようとするカミアント伯〈Count Cumiant〉はあなたの父上の妻の兄弟ですぜ。それから老伯の妻自身も捕縛されますか」「お前は僕に対するこの陰謀を些細な罪と思うらしいな」（最後の書類を読みながら）「何故私はこのように無惨な目に合わねばならないのですか。こうなれば私の生命をすぐにでも奪って下さい。それにしてもこの哀われな五体はもうお役に立ちませんか。……すべての不名誉は覚悟の上です。ただ私の不名誉をあっさりとしたもの、公正なものにして下さい。私とあなたの間を世間が判断するのに公平なものにして下さい。私に対するあなたの信頼を取り戻して下さい。私はあなたの信頼を今は少しも持っていません」「此処に気紛れを言う男がいる。僕の父の虚偽に生命を賭ける男がいる。僕は命じる……」「私はあなたに対して虚偽だったのではありません。老王は二重にも三重にも虚偽でした。しかし今この役を私に命じてはなりません」「そこに書いてないと言うのか。それなら、それを渡せ。僕はそれを正してやる」「それはそこに書いてあるってですか。そうです。明白です。今、王を捕縛なさい。あなたの父を此処に引き摺り出しなさい」「もう一言言うぞ。逃亡中の王を連れて来い。でなければお前の生命は貰ったぞ」「はい、タリンへ連れて来ます。明日でもよろしいか」「此処へ今すぐにだ。すべては嘘だ。憎むべき嘘だ。僕が信じていたように、父が口にされていたように。僕は初めから知っていたのだ。しかしお前には知らぬ風をせざるを得なかった。アルベロニ〈Alberoni〉を欺き、コシア〈Coscia〉を騙すなんてお前は偉い男だよ。でもなあ、父子間のこの不和の哀われむべき種を蒔いたお前は到頭最後に苦しんでいる。本当にお前は到頭来るべき処に来た

ぞ。お前のこの計画は下手糞だった。病気の年老いた、気難しい、早口の喋り屋の、無思慮の、また威し屋の父を、お前は充分に苦しめたぞ。お前の今迄の仕事は、僕には充分すぎる程分かっていた。僕の書類を捜し廻り秘密を探ぐること、金で雇ったスパイ共の毎日の報告を念入りに調べ父に伝えること、父はその報告を聞くのが倦怠の淋しい時の慰めであったという具合。所がお前はすべてが熟して来ないのを知った。成果の得られる時機でなかったので、お前の希望としては熟して来ない方がよかった。ただ僕にとって最もよかったのは父に会わなかったことだ。老人は弁解に強いからなあ。所でお前は僕に必要なんだ[t]」

(三) 王位を放棄しようとするチャールズ王と断固それを保持させる后ポリゼナ

ここでポリゼナ口を出し夫と問答[30]をする。「チャールズ[a]」と大声で窘める。夫は言う「問うな、そなたも僕に反対すると言うのか。僕の周囲に嘘がこんなにとぐろを巻き窒息させようとしているのに、僕が安閑として食べ、飲み、眠り、生き、死ぬことを望むと言うのか。そなたは父の裏切り行為に生命の危険を冒すと言ったじゃないか[b]」と。今度は夫は大臣に命令[31]する。「所でドルミア、色々と考えてみると僕の周りに巻き付けられた鎖、僕が王に相応しくないとの証言を無視する権利は僕にはない。僕は、いや僕の魂は、それを信用しないが矢張りそれを正当と認める[a]ぞ[b]」と言い、その後一挙に王とドルミア一味と勝負を決めようと次のように言う「ペルギア〈Perugia〉はいるか。ペルギア伯、お前とソーラ〈Solar〉はお前達の持っている全軍を率いてドルミアの命令に従い[c]、かれの命じることを絶対に実行せよ。……さあ、ドルミア仕事を初めろ。お前の王と国を救うために逮捕状を取れ[d]」と。大臣は命令に従い言う「君、ペルギア伯、新王の命令を聞いたろう。わしに従え。君の働き次第で褒美が貰えるぞ。皆をモンカグリエルへ連れて行け[e]」と。新王が「ドルミア行け[f]」と言うと大臣は出て行く。新王は妻に「あいつはぞっとするような笑いを浮べ、晴れ晴れとした顔で行くぞ。事の一切が少しは分かったかい[g]」と。チャールズは父と大臣の企みを暴露はしたものの今や遣り切れない思いに陥っている。その時、妻が言う「この方法は私共を守りますの、警戒の手段ですの[h]」と。夫は答える「これが最善の方法に違いない。でなければ父の軽蔑の下に枯れてしもうべきだったのだ[i]」と。すると妻が問う「それは何の事をおっしゃっていますの[j]」と。ここで夫は大きな賭の失敗した場合を予想して妻と語り合って、王位に執着のない自らの心境[32]を明かす。「僕が王冠を保持すると思うのかい[a]」「父上は大臣に連れられ果してお出になると信ぜられますか[b]」「信じるってかい。父の連れられて来ることは分かっている。父が来れ

ば、今僕を支持している力は僕を捨てると感じるのだ。その力は今迄は僕のものであったが、今は老伯がかれの力を再び取り返す。ある程度の力[c]は僕にもある。しかし王冠を保持する力は僕にはない。僕は僕の王冠を捨てる。今迄は王冠を保持する積りだった。しかし今はそれはできない。しかし父はもう僕を嘲笑しないだろう。戦を交えずして王冠を取り戻すんだから。……僕は父を逮捕する令状を命じた。もうそれは過ぎたことだ。こうなった以上はわれわれは逃げるがよい。僕はタリン城が嫌だから。このリヴォリも嫌だ。すべての称号が嫌だ。王国も嫌だ。そなたの国へ行くが最もよい。神が今僕を死なせない限りは。……そうなればそなたは再び僕のポリゼナに還えるよ。今はそなたに物を言ってもらいたくないから、僕は喋り続けるよ。そなたはまた父に反対するような忠告を与える心配があるからな。でも今は話そう。仕合せであった時に、二人が話し合ったように。僕に父の気紛れを耐えさせてくれ。父より上のこの狂ほしい王の地位から放してくれ[d]」と。妻は「あなたの頼みのすべてはドルミアなんです。それも僅かな護衛に到るまで。兎も角、大臣が父上と示し合わせているとすればどうしようもありません[e]」と。かの女は夫が危険を冒して大きな賭けをするためドルミアに軍を任せた心情が分かっていないのである。それを察して夫は「それじゃ、なぜ大臣が父をここに連れて来るか分かっているのかい。父の譲位を取り消すためだぜ。かれの過去を取り戻し、僕の未来を邪魔するためなんだよ。かれの情婦をそなたの地位に据え、僕の地位に納まるためなんだ。それでも、そなたは、そなたが色々と問うてやり、相談に乗り世話をしたために、手を上げ挨拶をしてくれる人民がいるとでも言うのかい。誰がいると言うのかい。みんな虚偽の塊だぜ。頭の天辺から爪先まで虚偽の塊だ。精精よいことと言えば、僕が初めから僕の心の中ではそれを知り、こうなると分かっていたことだ。僕は一時そなたを嫌ったよ[f]。なぜなら、そなたは父の正体を見抜いたからなあ。尤も僕も見抜いたがね。父が僕に王冠をかぶせる間、父が僕のために祈る間、父が僕の額に接吻する間、父が意図していることを見抜いたからなあ[g]」と言い、妻がドルミアを信用するかの口吻に反対の意を示す。するとまた妻は「あなたの政治の効果のあったのは、大臣があなたに誠実であったからではないのですか[h]」と言う。夫は激怒するかのように言う「それが一番いけないのだ。僕はあの冷酷な奴を父に解放しようと思うのだ。そんなことを言って、そなたまでが僕を嘲笑するのか。それなら父を憤慨させたあの王位に父を復帰させるためにドルミアを遣わすぞ。僕は父の復位に就いて父と話し合いをする。父は寝床で恐らく随喜の涙を流す。そこへドルミアが現われる。灯が消される。どやどやと人が集り、扉が閉まる。暗がりで恐ろしい乱闘が始まる。呪わしい一瞬が速やかに過ぎる。わが衛兵よ。馬だ。防げとなるんだ[i]」と。しかし妻は冷静に言う「チャールズ王、永遠の中のこの一瞬をちょっと待って下さい。王冠は神からの授りも

のです。あなたの一生はそれがあなたに相応しいものとすれば、そんな取るに足らぬものではありません。王位と共に捨てられるにしても。今は王位も一生も保持して下さい。あなたの義務は生きることと支配することです。世間の目には、庶民的に充分ご立派に見えるあなたが、あなたの魂の責任をお捨てになることはいけません。あなたは人民の称賛を受けておいでです。このリヴォリは明るく照らされています。しかし実のところ何かの欠点があなたにもあることは疑はありません。しかし誰も何故あなたが退位を強制されねばならないかなんて分からないでしょう。人々があなたが今迄なされた行為に就いて称賛することは疑ありません。このままでは私共はもう幸福には暮らせません。この数分間程、王としての義務をはっきりさせる時はないと存じます。この数分を誤れば、王の義務が痛ましくも不明瞭になる幾月幾年が到来し、私共は毎日過去の思い出を孕んだまま、この宮廷の各部屋を歩まねばならなくなるでしょう。あなたの目は私の目に向いていても、そこには慰めは見出せなくなるでしょう。遥か別の問題で、別の方向へ進むあなたと私を取り巻く幻想で私共は今日も今夜も過ごさねばならなくなるかもしれません。それも耐えましょう。屹度耐えます。でも幸福とはどんなに大切でしょうか。王としての義務です。男のこの一瞬です。これはあなたのものです[i]」と言ってかの女は王冠をかれの頭に置き、王笏をかれの手に置き、かれを王座につかせる。

(四) 捕縛した父へのチャールズ王の譲位と喜びのあまり急死する老伯ヴィクター

捕縛された老伯がドレミアと衛兵に囲まれて登場。親子の間に次の対話[33]が交わされる。「最後に言いたいことがある。ただ一度だけだ。それもお前に。わしが尋ねるのはお前にだ。これらの従者共ではない。サルジニアの王は誰だ」[a]チャールズ「テンデ伯です」[b]ヴィクター「お前のスパイ共はわしが心のうちでつらつら考えていることを何と言っているか。此処お前の面前で、お前の衛兵の真ん中でわしは言うぞ。わしがその影を与えた王冠をわしは取り返すぞ。重罪犯人の輩がその心を動揺させた弱い白髪を、尚も王冠の力が取り巻いているからなあ。でなければ『誰が王か』なんか問うものか。わしの要求する王冠を差し押えているのは誰かと言うのだ。それを渡せ。この広い世界には、わしに一人の味方もない。フランスもイギリスもわしには構ってはくれない。でもわしの用い得る兵力の総計を見ろよ。王冠を渡せ」[c]チャールズ「父上、王冠を取って下さい。その代りに言って下さい。うまく終ったと言って下さい。確実にうまくとまで言われなくとも、このように私を試すことだけは終ったと言って下さい。私が王冠を維持すべき理由は多く見出すことはできます。それはあまりにもたやすく見出すことはできます。でも私の生命はほっておいても、やがて

は悲しくも衰えます。その自然の悲しい衰えよりももっと悲しく、あの瞬間から衰えました。既に父上は王の責任を負うべき多くのものを持っておられます。衰え行く私の生命は無に等しいのです。私の妻のあの沈んだ目も曾ては仕合せでした。人民も私がかれらの王と尚思っています。しかし私は王として励むことはもう出来ません。王冠をお取り下さい」(チャールズの捧げる王冠の上に片手を置き片手をチャールズの上に置きながら)「息子よ、王冠をこ数年間だけ静かに保有させてくれ。するとやがてわしからお前に落ちて行くぞ。それが分かるかい。王冠は強い者から弱い者にくれてやる剣に似ないものだ。王冠は中風の額からこのように若い頭に滑り落ちるものである。しかもわしの頭は、わしの知る以上に弱い。それでわしの王冠を得べき権利を立証する言葉を今捜している。それは首尾一貫しているんだ。わしのすべては敵に打ち勝つという一つの目標だけなんだ。わしは曾てはオルレアン〈D'orleand〉公をかれの防衛要塞線で打ち破った。かれ自身の要塞防衛線でなあ。ミラン〈milan〉の総督ユージーン〈Eugene〉の友であり、ルイ〈Louis〉の競争相手の彼奴をだぜ。そして今……」(王冠を王の頭の上に置き、皆の者に向って)「王が物を言っていられるのに誰も跪かぬのか」「息子がこう言ってくれる。だからわしが王なんだ。国民が何と言わうと、わしは王となり自ら王を称えるのだ。そして王として死ぬ。わしの死と共にわしの王政も消える。わしのヨーロッパ制覇も随分永い間続いた。わしの制覇の成就に何が欠けているというのか。糞。わしのどこに失敗があるというのか。誰がわしの子供を疑うのか。わしの一生の日の出と、赤く燃える夕日の間に何か欠陥とか失敗があると子供達は言っていると言うのか。わしが死ぬ時、子供達の外に誰が傍にいるというのか。そこのドルミアどうだ」「ドルミアは一体どんな奴ですか」「いつもお前の言い分を助けようとしてたよ。だが今度はわしの言い分を進めねばならぬ。それ、それ、お前はわしの王位を拒んだ。そのお前の言い分は、今度はわしの言い分だ。お前はわしをチェンバリーに監禁しおった。丸一年間お前をちょとも見なかった。そのまま死ぬところだった。それはお前の目的に役立つことだったろう。そのわけを皆に話せ」「私を疑われますか。私はお援けしましたのに」「それは援け以前の問題だ。援けの届く以前の問題だ。お前はわしの心の問題に触れることは出来ぬ。これがわしの心を壊したのだ。わしはそう信じていたよ。お前はわしを拒み、わしを辱しめたろうが」この時、ポリゼナが口を出す「チャールズはあなたの臣下であることを決してやめたことはありません。かれはあなたを手本として政治の仕事を手掛け、初めからお手本通り一貫して治めています。ご老体に一々相談致しましたことは、かれがあなたさまに残酷に見えたかもしれませんが、それはあなたさまのご性格をあまりにも高く、強く評価した結果でございます。この目的以外の他のことを求めて一瞬時と雖もかれがあなたさまに行動したことは決してありません。それは事実と思います。そのため事態が一層悪くなるとすれば、

世界を敵にまわしても私はかれを支持します。それは本当に事実なんです」[i]と。チャールズはポリゼナに向って「僕は本当にそなたを愛する[m]よ」と言い、ヴィクターに向って「あなたは私を決してご存知なかった[n]」という。ヴィクターは「今のこの瞬間までお前を殆んど知らなかった。多くの他のことを知ったこの瞬間まで。尤も知った多くのことを利用する時はもう過ぎてしまった。けれどもなあ、これをうまく用いることを切に望むがなあ。でもそれは無駄な願いかもしれん。誠実は企みと同様策であるかもしれんなあ。これはわしの娘の額か。そうだ。わしはこの額を以前よりも一層后に相応しい額にした。この額は王冠の滑り落ちるのをあまりにもよく防いだ。そしてわしの皺を一層深くした。そんなこと構うもんか。企みがわしを再び王にしたのだ。ルイが王だったのはヴィクター王の時代だった。以来永い間ルイが支配した時、ヴィクターも亦支配した。世人はいかにわしら二人を口にしたことか。二人共日食の神となり、色褪せた星とならん。ではどうしてわしはぐずぐずしておれるか。おーい、かれは何処へ隠れたか。ドルミア、もっとお前の王の近くに来い。さあ立て。（ドルミアが近づく）（と全力を集中して）ドルミア お前は嘘を吐いた。だがわしは後悔はしないぞ[o]」（王死ぬ）

(五) 結び

王とか皇帝といった権力者はその常として権力の座にありながら、権力の座を保持するために、その心は絶えず不安の状態に置かれるものである。ヴィクター王は宮廷に権力の根を深く張り、王として鎮座することに生き甲斐を感じていた。しかしかれも権力者として、その心はいつも不安の状態にあり、一刻も平穏無事の時はなかった。そこに老いへの恐れも加わり益々苛立ちを覚えるのであった。殊にかれが外交、内政の失敗のため、その責任を転嫁するため心ならずも、極度に嫌う息子チャールズに譲位した時、息子が外面は気が弱く、そのため気の強い妻に寄り掛かる凡庸に見える男ながら、内面は以外に決断力のある賢明な王子なるに引け目を覚えるヴィクターの心情は権力者の不安そのものである。これがこの劇の基調となっている。一方チャールズは矢張り人の子として当然の希望を人生に持っていた。即ち王室に生を享けた以上、父が情愛のある父であれば王位を継ぐことを望んでいた。しかし父は獰猛、苛酷と言える程子を憎悪しているとなれば、子として自らの希望も断念せざるを得ない心情にあった。この時、突然無理矢理に父によって王座につかせられたのであった。一瞬気絶するのも当然であった。しかし王位にありながらも人間として人間らしい真の生き方に生き甲斐を覚える男であってみれば、やがて王座に未練がなくなり王位に固執しなくな

って行くのもまた自然の成り行きであった。ここに王座に執着する父と、王座に固執しなくなった子の相反する性格が際立って行き、これがヴィクターの権力者の不安というこの劇の基調を一層鮮明にしているのである。然しながら親子の人間関係というものは不思議なものであり、また妙なものである。即ち息子チャールズが王座にありながら、夢を見る子供のように無垢であり、虚心であり、果しない真の人間生活に執念を燃やすに対し、父ヴィクターは王座を失った後に一層権力への執念を深くするのである。これは両者の人生に対する価値観の相違と言えばそれまでであるが、実の親が実の子を極端に嫌悪し、しかも嫌悪された子が親に孝行するという今日の世相とは逆の親子関係の不思議さ、更には極度に嫌悪した子の孝心に最後に父が喜びの衝撃死をする親子関係の妙はこの劇の圧巻である。換言すれば子チャールズが、権力欲への執念にしがみつく父のバイタリティ〈vitality〉に圧倒され、父の獰猛な苛酷な憎悪に苦しみながらも、親子という血縁のために、出口なしの窮境の限界状況下で苦悶し、最後に父の復位を認めること及びそのチャールズの心情に流石の冷酷な父ヴィクターも喜びの衝撃死をするというこの親子の人間関係の不思議さ、妙、これこそはこの劇ならでは味えぬもの、私はこれに深く心打たれるのである。またこれ以上に更に私の心を打つものがある。それはチャールズの清浄の心である。というのはかれの真実追求の厳粛さ及びその厳粛な追求の彼方に横たわる自己犠牲の清浄の心の美しさである。チャールズは父とドルミアの企みを発くことによって事の真実を追求するのであった。しかし老獪な父と狡猾なドルミアとその一味に取り囲まれたため、かれはただ自らの誠実の心と持前の鋭敏な勘を頼りにするだけの真実の追求であった。これには得も言われぬ困難が横たわり、愛する妻でさえ、企みの餌食になりかねない状況であった。従ってかれの真実の追求はただ自らの力のみであった。これこそ真実追求の厳粛そのものである。この真実追求の厳粛というものが、親子の血縁という繋り、従って父への孝心というかれ独自の、かれ自らへの問い掛けから、その真実追求に悩むのであった。その結果、かれは自己主張も大切であるが、自己の苦しみは自己独りで耐えねばならぬと考えたのであった。即ちかれは父とドルミアの企みの真実を追求したものの、その真実追求の果てに自己犠牲の尊さを発見したのであった。そこから悪辣な父の心を最後にゆさぶる父の喜びの衝撃死が生じたわけである。結局、この劇に於いては真実追求の厳粛の果てに犠牲の尊さが強く打ち出され、人間には親子関係のみならず、すべての人間関係に於いてそれぞれの欲望の彼方に人間の自己犠牲という清浄の心のあることを示すものではないか。

〔I〕 参考文献

1. Stopford A. Brooke: Browning
2. William Sharp: Life of Robert Browning
3. Edward Dowden: The Life of Robert Browning
4. Arthur Symons: An Introduction of the Study of Browning
5. Edward Berdaoə: The Browning Cyclopadia
6. Mrs. S. Orr: Handbook to Browning's Works
7. Charlotte Porter and Helen A. Clarke: King Victor and King Charles

〔II〕〔註〕

① Part I, ll. 22—26

② Part I, l. 26

③ Part I, ll. 27—29

④ Part I, ll. 29—32

⑤ 実はこの書類に新王の退位要求の件が書いてある。ドルミアはチャールズの性格を知るが故に，チャールズは父の要求なら仕方がないと退位を決心するとの算段をしていたのである。しかし自らの進言の証拠が残らぬようにと付け加えたのは，いかにも忠誠ぶったドルミアの狡猾振りを示すものである。更には新王よりもさきに后に告げ，納得させておく心づもりに到っては図々しさの限りである。

⑥ Part I, ll. 38—42

⑦ Part I, l. 42

⑧ Part I, ll. 43—46

⑨ Part I, ll. 46—48

⑩ Part I, ll. 49—54

⑪ Part I, l. 55

⑫ 「そなたは分からないのか。サルジニアの国の内外の混乱，父上がそれに巻き込まれ，僕がそれを知り，父上の名声を世の悪口から一掃するまでは，僕は休息を取らない，微笑もすまいと誓った日が過ぎたのだ。僕は人民を正常に戻した。それは民政上充分の効果があった。貴族の不平も除いた。しかし国内で起ったことは左程恥ずかしい事でなかった。恥ずかしいのはすべての外国で父上のなされた事だ。もし僕が，怒る列強を宥め，醜聞をなくし，悪名の高所から父上の名を取り落す仕事が出来れば，その時こそほっと息をつき休息が取れるというものだったのだ。それは一刻の猶予も許されなかった。そして僕の誇るべき成果を収めたのだ。オーストリアもスペインも条約に同意したのだ。その知らせがヴィエナ〈Vienna〉から到着した。僕は それを 父上に 知らせる急使を派遣する

ためエヴィアン〈Evian〉に滞在してたんだ。チェンバリー〈Chambery〉にその情報は一週間前に届いた筈だ。だから今日，僕は此処に帰って来た。そなたの温かい白い腕を僕の身体のまわりに感じるに値するではないか」ll. 56—77

⑬ ⓐ Part I, ll. 105—107

ⓑ これはドルミアがチャールズに忠誠ぶった言い方をしているが，実はドルミアの狡猾な正体を現わす言葉である。

ⓒ Part I, ll. 110—113

ⓓ Part I, l. 114

ⓔ Part I, ll. 114—117

ⓕ Part I, ll. 121—122

ⓖ チャールズが王位につく前に，王の情婦と共にチャールズの愚者であると宣伝したこと。

ⓗ 今はチャールズ王の大臣であること。

ⓘ ここにもドルミアの画策がある。

ⓙ Part I, ll. 123—128

ⓚ Part I, ll. 128—129

ⓛ Part I, ll. 130—133

ⓜ タリン城に老伯がいるのを承知の上で推測と言うのはドルミアの狡猾さも大変なものである。

ⓝ Part I, ll. 133—134

ⓞ Part I, ll. 134—135

⑭ ドルミアとポリゼナの間にチャールズの知らない何かが隠されているものがあるとチャールズが感じてのかれの推察のこと。

⑮ 老王が王冠を取返す意図の疑があると言っているのはドルミアの企みであると妻に言いたいチャールズの心情。

⑯ チャールズは，妻がドルミアに騙されて，父がタリン城に来ているのを知らないことを歯痒く思っているし，且つ自らはそれを知り，父の王位回復の意図を知っている。それで子として内心では自ら進んで父の希望を叶えたいと希望している。しかしドルミアの企みによっては，そうしたくないので，妻がドルミアを信用せず，ドルミアの言葉を虚偽と考えて欲しいのである。

⑰ Part I, ll. 136—140

⑱ 人目を避けるため，大臣と会わぬように今迄注意していたから。

⑲ Part I, ll. 144—189

⑳ 註㉕のⓒの王の金銭の要求。

㉑ Part I, ll. 225—231

㉒ Part I, ll. 232—234

㉓ Part I, ll. 234—236

㉔ ⓐ Part I, ll. 237—242

ⓑ Part I, ll. 242—244

ⓒ Part I, ll. 244—248

ⓓ Part I, l. 248

ⓔ Part I, ll. 248—264

ⓕ 老伯の心にもないことを口にする図々しさにあきれ果てる言葉である。

ⓖ Part I, ll. 268—271

ⓗ Part I, ll. 272—309

ⓘ 「それは分かっとる。しかしお前はわしが遂行した仕事，わしの辛苦と心配の生涯を帳消しにしてしまった。わしはヨーロッパに於ける絶対支配をお前に残した。わしがヨーロッパから離して取って置いたサルジニアを，気狂いじみた民主主義とかの渦巻の中へ，全ヨーロッパ並みに巻き込まれるのを，わしがただ見ているだけと思うのか。英国は民衆に王を投げ出した。フランスは英国の真似をしている。わしは，わが王国だけはそんなことのないことを望んでいたのだ。わしの力でそれを救える時に，災を招くことによって，民衆はわしの言うことに従わなくなった。その災の中にお前もいる。それは確信をもって言える」ll. 309—323

ⓙ 「父上，そうは言えません。もし私が権力を乱用しておれば，父上に対する民衆の悪口以上の痛烈な悪口をずっと以前に私は受けていたでしょう。これを恐れて私は色々の手段を用いました。私は悪口は我慢します」ll. 324—328

ⓚ Part I, ll. 338—354

㉕ ⓐ Part I, ll. 362—373

ⓑ Part I, l. 374

ⓒ Part I, ll. 374—390

ⓓ Part I, ll. 390—391

ⓔ Part I, ll. 398—400

ⓕ Part I, ll. 401—402

ⓖ Part I, ll. 403—404

ⓗ Part I, ll. 406—407

ⓘ Part I, l. 407

ロベール・ブルクリンクの戯曲「カイゼル王とチャールズ王」

ⓙ Part I, l. 408

㉖ Part II, ll. 1—24

㉗ ⓐ Part II, ll. 25—29

ⓑ Part II, ll. 34—35

ⓒ Part II, ll. 51—57

㉘ ⓐ Part II, ll. 61—62

ⓑ Part II, ll. 63—64

ⓒ Part II, ll. 64—65

ⓓ Part II, ll. 65—68

ⓔ Part II, ll. 68—69

ⓕ Part II, ll. 70—71

ⓖ Part II, ll. 71—72

ⓗ Part II, ll. 73—76

ⓘ Part II, l. 74

ⓙ Part II, ll. 75—81

ⓚ Part II, ll. 81—82

ⓛ Part II, l. 82

ⓜ Part II, l. 83

ⓝ チャールズはドルミアから，フランス軍の侵入の報告を一時間前に受けたので，直ちにレビンダー及びサン・レミに警戒命令を出していた。

ⓞ Part II, ll. 83—86

ⓟ Part II, ll. 86—89

ⓠ この一覧表に出ている人物の名を見れば，チャールズは恐れて退位を決心し，老伯の言う通りになるとのドルミアの策略。

ⓡ Part II, ll. 90—101

㉙ ⓐ Part II, l. 101

ⓑ Part II, ll. 106—110

ⓒ Part II, l. 110

ⓓ Part II, l. 110

ⓔ トルキエル以下の人物はドルミアがまさか捕搏されることはないと思っていたので驚いたところ。

ⓕ Part II, ll. 111—115

ⓖ Part II, l. 115

ⓗ Part II, ll. 115—116

ⓘ Part II, ll. 117—119

ⓙ Part II, ll. 120—124

ⓚ Part II, ll. 124—125

ⓛ Part II, ll. 125—132

ⓜ 父を逮捕することを命じたこと。

ⓝ Part II, ll. 133—135

ⓞ Part II, ll. 135—136

ⓟ Part II, ll. 136—137

ⓠ Part II, ll. 137—139

ⓡ Part II, ll. 140—142

ⓢ Part II, ll. 142—143（この言葉は老王がタリン城に来てないような嘘をまだ言おうとするところ）

ⓣ Part II, ll. 143—163

㉚ ⓐ Part II, l. 164

ⓑ Part II, ll. 164—168

㉛ ⓐ チャールズは老伯とドルミア一味の自らの王に相応しくないとの考えを認めると言って，ドルミアの気を引いておき，かれの周囲のすべての者の考えも，これと同じかを試めしたのである。

ⓑ Part II, ll. 168—173

ⓒ ペルギア伯及びソーラはチャールズ直属の軍の指揮者であるが，この際，チャールズは王位に執着がないので，老伯側のドルミアに，両将軍の帰趨を任せ，両将軍がどう出るか賭をなし，勝負を決めようとしたのである。結果は次章が示すように両将軍はチャールズに忠実であった。

ⓓ Part II, ll. 173—185

ⓔ Part II, ll. 186—188

ⓕ Part II, l. 188

ⓖ Part II, ll. 189—190

ロベール・ブルカンの悲劇「ウィクトール王とチャールズ王」

ⓗ Part II, ll. 190—191
ⓘ Part II, ll. 192—193
ⓙ Part II, l. 193
㉜ ⓐ Part II, l. 194
ⓑ Part II, ll. 195—196
ⓒ レビンダー及びサン・レミ等，チャールズ王の味方の武人。
ⓓ Part II, ll. 196—219
ⓔ Part II, ll. 221—223
ⓕ チャールズは，父の企みを見抜きながらも，子としてそれを口にせず耐えていたのに，妻はそれを知り，はっきり反対したことに就いてのチャールズの不満の感じ。
ⓖ Part II, ll. 225—238
ⓗ Part II, ll. 239—240
ⓘ Part II, ll. 240—252
ⓙ Part II, ll. 253—280
㉝ ⓐ Part II, ll. 281—282
ⓑ Part II, l. 283
ⓒ Part II, ll. 283—293
ⓓ Part II, ll. 294—303
ⓔ Part II, ll. 304—314
ⓕ Part II, l. 315
ⓖ Part II, ll. 316—325
ⓗ Part II, l. 325
ⓘ Part II, ll. 325—331
ⓙ Part II, l. 332
ⓚ Part II, ll. 332—335
ⓛ Part II, ll. 335—344
ⓜ Part II, l. 344
ⓝ Part II, l. 345
ⓞ Part II, ll. 345—361